

○Aさんへのインタビュー（no.031）

◆対象者

同志社大学文学部哲学科4回生 ○Aさん（25）

内定先：クラブツーリズム

◆質問

主に、面接で気にしたこと、就活に必要な準備についてポイントを絞った。

Q、面接での心構えは？

A、第一印象を良くするために、挨拶、返事はハキハキと答えるように心がけた。また、面接では正直に話すこと。正直に話すことというのは自分に‘軸’があるからできること。

軸を持っているので、普段の話し方（学生同士での会話ではなく、目上の方と話すときの）で、聞かれたことについて自分がどれだけ分かっているのか、理解が深いのか、逆にわかっていなければ素直に謝ることもできた。表面的な嘘は必ずボロがでるので、しないこと。簡単に見破られてしまう。

また、簡潔に話すようにした。集団面接ならなおさらであった。そして遅刻はしないように、いつも一時間以上前から面接会場の周辺にはいるようにしていた。

Q、軸とは何か？

A、軸とは信条みたいなもの。これまで自分を築きあげてきた経験に加え、就職活動という経験を通して、将来のビジョンが持てたときに、自分が何をしたいのかが自ずと分かってくる。企業研究などもしっかり行ったが、この自分の軸にぶれがなかったので、面接自体に不安は感じなかった。

自分は二年留年したため（一年の浪人経験もある）、そのことがマイナスポイントであった。しかし、面接官には下手な嘘はつかず、留年した原因とそのときの問題対処の遅れと挫折とそこから得た反省をしっかりと答えた。

この自己分析は、正直高校時代よりも大学時代のときの自分を省みることが一番重要だと思う。なぜなら、大学時代に人の輪が一気に広がり、また自分の時間（自分が過ごしたいように過ごせる時間）をたくさん持てたから。

面接では個人面接の他に、集団面接、グループディスカッション、プレゼン面接を行った。いずれの面接でも普段通りの構えで臨んだ。プレゼン面接ではレジュメを作ったが、面接官には項目程度しか書かれていないレジュメを渡し、綿密に書かれたレジュメ

は自分用と人事に渡す用しか用意しなかった。プレゼン面接でのレジュメはしっかりとしたものを作成できたおかげで、褒められたりもした。

面接全体では、主にコミュニケーション能力を見るのだと思う。なのでそのことに注意したが、三年間のサークル活動で十分にコミュニケーション能力を持てたと思うし、普段から喫茶店などで初めて会う人々と話していたのでまったく不安には感じていなかった。

Q、エントリーシートは何社出したか？

A、全部で10社程度。他の人よりも少ないと思う。しかし、説明会などで計40から50社程度の説明を聞いて、また自分で企業研究をした結果10社となった。もちろんこのうち2社程度は保険として受けていた。

最終面接まで何社か通ったが、すでに希望する内定が取れていたため、雑な回答をして落とされたと思う。また他社状況についてよく聞かれたが、他人と違ってそもそも面接を受けている会社が少なかったために、答えづらかった。

Q、就活本のお勧めは？

A、『絶対内定』。たくさんの本を購入したがあくまでも気休めだった。本よりもキャリアセンターをよく活用した。就活についての相談やエントリーシートを見てもらったりしていた。二月になると混むので、10月とか早めからできる相談はしていた。

まとめ

OAさんはサークルの先輩ではあるが、二年留年しているためサークル活動を共に過ごしたという経験はない。逆にその二年留年というハンディを就活でどう切り抜けたのか、もしくはプラスにしたのかが知りたかった。本人も相当気にしていたため、そのことを面接官に突っ込まれることも分かっていたので、答えをしっかりと用意したそう。この面接に対する準備とは、プレゼン面接を除いて、この程度だったらいい。インタビューの中でもわかるが、本人はそれまで自分が経験したことと、就活に直面することによって今まで漠然であった将来像がしっかりと形になり、自分の軸を見出すことができそれが自信となって、正直に答えることが自分の良さを知ってもらうことができたと考えている。

インタビューでもある通り就活本は多く購入したそうだが、あくまでも気休めのためだそう。『絶対内定』はよく参考にはしていたという。就活本よりもキャリアセンターをよく利用したという。キャリアセンターをあまり利用しない学生も多いが、同期での就活生が少なかった先輩にとっては、とても有意義な場所であったようだ。

OBさんへのインタビュー (no. 032)

◆対象者

同志社大学法学部法律学科 4 回生 OB さん

内定先：郵政

◆質問

主に、面接で気にしたこと、就活に必要な準備についてポイントを絞った。

Q, 何社ほど ES を提出しましたか？

A, ES は合計で 50、40 社ほど出したと思う。しかし、もともと金融、メーカーや商事などには興味がなく、主にインフラ、食品関連に的を絞ってはいた。また説明会に積極的に参加することで就きたい職や働きたいと思える職場が絞られた。計 70 社ほどの説明会に参加したと思う。

Q, たくさん面接を受けることは心身ともに疲れるかとは思いますが、苦勞されたことはありますか？

A, 日に 2 から 3 社の面接を受けることがあった。そのときに提出した ES のコピーを自分でも持って、待ち時間の間に企業の案内について再度目を通し、ES のコピーにも目を通しておいた。面接を何回も受けていると面接官からどのような質問がされるか分かるので (学生時代に励んだこと・他社状況・志望動機 etc.)、また面接慣れもしてくるので、どのように答えればよいのかが分かってくる。ただし、やはり一つ一つの企業研究は HP 見ただけの浅いものとなっていたかもしれない。

しかし、同じ業種の企業の面接を受けるので、例えば東海出身で関西の大学に通っているのに、なぜ JR 東日本を受けるのか？なぜ東京電力を志望するのかなどといった質問に対してうまく答えられなかったり、質問に対して長く喋りすぎてしまったりなどしたことがあった。面接官の顔を観察しているとしゃべりすぎだなということも分かってくる。

さらに面接も終盤になると東京が会場となってくるために、日ごとに東京・大阪を行ったり来たりすることもあり、財政的にも大変だった。

Q, 面接で心掛けたことは？

A, 第一印象よく、しっかりとコミュニケーションをとるということ。遅刻しないようにしたが、5分前に会場に着いていても既に集団面接が始まっていたこともあった。また東京での面接のとき、メールで面接開始時間の変更が知らされていたことに気づかず、結局謝ってなんとか最終面接者の後に受けさせてもらったこともある。

面接では主に続けてきたサークル活動について話したと思う。大学生活でバイトやインターンなど長く続けてきたものは他にあったが、サークル活動というものはボランティア的であって、自分から動かなくてはいけないため、また幹事長としてサークルを引っ張っていた経験などが面接官にとっても興味を引くものだったと思う。面接官の食いつきが違った。

Q, 就活前もしくは面接前に具体的にどのような準備をしていましたか？

A, 就活が本格化する前は就活を終えられた先輩方に話を聞いていた。また面接前は同期と一緒に面接の練習をしたり、他己分析を行っていた。SPIの準備も行ったがそこまで力を入れていない。就活のためにTOEICを受けたりもした。就活本も買ってはいたが、それほど気にしていたわけではないし、キャリアセンターもあまり利用しなかった。

Q, 面接会場以外で企業の方とお話されたそうですが、今回の内定などに影響はあったと思いますか？

A, 影響はあった。内定選考に影響は与えないと向こうは言うが、‘個人的’な会食であったり本社案内であったりしても、結局は顔を覚えてもらうことに繋がったし、人事の方にも紹介してもらった。また直接企業の方と話すことでその職場で働きたいといったモチベーションが上がる。説明会やなんかで名刺をもらったならその日のうちにメールをするように心がけ、そうしたことがこのような交流につながった。

まとめ

話が進むうちに、学歴の影響と関東と関西の学生について先輩の口から少なからず語られた。実際、大手企業となると有名私立大学出身者が面接に上り詰めてくる、もしくはそもそもそれ以外の大学はその企業を狙ってすらいらないのかもしれないと感じることも多かったようだ。確かに週刊雑誌でも大学別志望企業ランキングなどで関西の有名私立大学、早慶、MARCH、東大京大一橋別でランクインする企業に違いがはっきりでている。(例えば「難関大学」とされる早慶東大などは三菱UFJなどのメガバンクや商事がランキングの上位を占めるのに対し、MARCHになるとそういった金融・商事の大企業の名前はランキングに出てこない。)

また、先輩は関東の大学生は社会人とのコミュニケーションに慣れているように感じたらしい。受け答えがしっかりしているのだとか。学歴について、また関西と関東の就活生の印象について少し調べてみたいと思う。

先輩は典型的な就活生と言えるだろう。業種は絞りつつもたくさんの企業を受けて、面接を経験していくことによって就活のスキルを磨いたようだ。もちろん、あらかじめ就活を終えた先輩方から就活とはどういったことをするのか、すればよいのか、どのような服を着ればよいのか、などと基本的な情報は集めていた。先輩とはサークルを通じて二年以上の付き合いであるが、彼は大学生活を通じてバイトとインターンシップを続けており、社交的で行動力がある人だと分かっていた。その人柄を、持ち前のコミュニケーション能力でもって短い面接時間の間に伝えられたようである。またどの課外活動でも人をまとめる、人を教育する立場であった経験が面接官に受けがよかったとも語っている。

しかし就活を通じて見えた自分の将来像というものは未だに曖昧で、むしろ様々な社会人との交流を通じて刺激され、社会で働くという目の前のことに期待を膨らませているようであった。

OCさんへのインタビュー (no. 033)

◆対象者

同志社大学経済学部経済学科 4 回生 OC さん

内定先：富士通

◆質問

主に面接でアピールしたこと、企業の選び方についてポイントを絞った。

Q、 企業を選ぶポイントとはどういったものでしたか？

A、 留学経験があり、将来海外で活躍したいと思っていた。だから、「海外に目を向けた企業」「目を向けていくであろう企業」を主に選んだ。主に商社で働くことを希望したが、他にもメーカーなど海外市場に目を向けた会社約 30 から 40 社ほどに ES を提出した。

メーカーの面接で他社状況を聞かれた際、やはり商社が向いているのではと面接官に言われたこともあったが、メーカーと商社の違いをはっきりさせて、その会社でしかできないことというものを強調して答えた。はっきりと差別化を行った。

ES はどれも留学のこと以外に地元でのスポーツサークルでの活動のことやバイトのこと、大学でのサークル活動など ES の提出先の企業のイメージなどに合わせてそれぞれ違ったことを書いた。ES を作成していくうちに自分が企業にアピールしたいことが明確になっていったと思う。しかし、たくさんの ES を提出したが、提出先の企業についての研究は浅いものとなっていた。このことは今年の就活生に当てはまることだと思う。

最終面接でのことだが、会社の当期の業績について答えるように求められ、調べておらず、面接官から企業研究について甘いと言われてしまった。また、経済学を学んだ者としての意見を求められたが「地に足の着いたことが言えないので・・・」と謝るしかなかった。二度目の面接で会社の業績を調べておき、業績を上げるための考えをまとめて面接に臨んだ。

Q、 留学経験は自己アピールにおいてプラスとなったか？

A、 留学経験だけではプラス要素にはならない。今の大学生で留学は珍しいことでもないし、商社に限ってしまえば、最終面接前に企業主催の勉強会で他の就活生と顔を合わせたとき、商社希望の人は留学経験あり・帰国子女・体育会のいずれかである。

なので、留学経験をアピールするのではなくて、過去の自身の経験のひとつの事例として自分の順応性をアピールし、日本語教師や大学内外での幅広い課外活動のひとつとして自分の行動力をアピールした。

Q、 アピールポイントを明確にしていく上で ES 作成以外に自己分析というものは役立ったか？

A、 自己分析をしていくとやはり自分の順応性や行動力について確認できたと思うが、逆に行動力があるならば大学入学以前からいろいろ出来たのではないかなどと考えてしまった。しかし、そういったことは考えてもしょうがないので、他己分析によって順応性と行動力を再確認したと思う。

まとめ

OCさんはシンガポールに約二カ月の短期留学、カナダに約一年間の短期留学の経験を持っている。さらに大学では二つのサークルを掛け持ちし、大学の外では地元でスポーツチームを組んでいる。また留学資金を貯めるために家庭教師の他に外国人のための日本語教師なども行っている。こういった経験から企業に対して自分の行動力と順応性をアピールしたそう。また、OCさん本人も指摘を受けたが、ES を多く出すことによって企業研究が浅くなってしまっていることを就活生自身も気にしているようであった。

また同じ業種内外の企業の面接を何社も受ける場合でも、企業の差別化を図ったらしい。

インタビューでの反省点

今回のインタビューで企業選びというものにポイントを絞りたいかったが、留学という経験に重点をはじめから置いてしまったために、OCさん自身がインターンシップ、OBとの会談を通して変わった企業の見方・選び方についても話を聞くべきであった。

ODさんへのインタビュー (no. 034)

◆対象者

武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科 4 回生 ODさん
進路未定

◆質問

美大における就活の形について、また学生時代に幾度か受賞歴があるので、そのような経歴が就活において有利に反映されたかについてポイントを絞った。その他、企業選
びについてなど。

Q、 美大卒業者、特にODさんのような工業デザイナーが行う就職活動の流れはどのようなものか？

A、 美大での就職活動は一般と違う場合がある。一般的にESを出して面接を受けるという流れもちろんあるが、教授の推薦をもらって就職を行う場合がある。但し、推薦は一社しかもらえない。企業はデザイナーとしての技量を見るほかに、組織の中で働いていけるかを面接では見られる。美大生はどうしても仕事が自己表現に直結して扱いつらいと思われているのだと思う。

Q、 どのような企業に就職したいと考えているか？

A、 工業デザイン以外に、人の生活をよりよくしていく様々な生活をデザインしていきたいと考えている。推薦で大手メーカーのインターンシップと面接を受けたが、メーカーだと革新的なデザインよりも技術の向上に目が向いているようで、社員さんの話や面接過程で、メーカーではしたい仕事ができないと感じた。もともとアメリカの企業 IDEO のような企業で働きたいと考えているので、日本の企業にはあまり魅力を感じていない。工業製品のデザインだけをしたいわけではない。しかし、日本の企業においては専門家が自分の専門分野のデザインを手掛けていくような印象しか受けなかった。

Q、 様々な受賞歴を持っているが、このことは就活において有利に働いたか？

A、 特にない。そもそも面接などした企業は2社程度で、しかも推薦枠なので関係ないかもしれない。就活前に広く人脈ができて様々な出会いを持てたことがよかった。個人的な仕事の依頼をもらえたり、留学先を紹介してもらったり、色々な考えや経験談を聞

くことによって自分の視点が広がった。そういった意味で今回一般的な就職活動をあまりやらなかったことを若干後悔している。就職活動でも様々な人と出会えると思うので、自分の考え以外のことを知ることができることは有意義だと思う。今年を始めから最近まで代わりに大学外でフリーペーパー作成に時間を費やしたが、他大生や社会人と一緒に仕事をする大変さを学べたと思う。

Q, 今後は何をしていくのか？

A, まだ勉強を続けるつもり。発展途上で勉強して、生活が厳しいところから人の生活を豊かにするデザインが生まれてくると思う。その後、仕事を国内外問わずに探していきたいと思っている。

まとめ

彼とは小学生の頃からの付き合いである。高校は工業高校へ進学したために、現在在籍している大学へは去年の春から編入生として入学した。彼が工業高校の終わりに制作した作品が 2008 年国際学生デザインコンペションでグランプリに選ばれたことがきっかけで、大学や企業、その他様々な人々が彼の存在を知り、繋がりが生まれることとなった。そしてこの繋がりが彼にキャリアアップの糧となった。インタビューからその人脈の広がりが自分の世界を見る視点の広がりに影響したと感じている一方で、工業高校在学時からの自身の考え方「生活をデザインする」といったことは今でもぶれていないようだ。結局その目的が働く目的と直結しており、企業選びの軸ともなっている。

美大生の就活の仕方というものは基本的に一般的な 4 年制大学と変わらないだろう。しかし、企業と大学との関係が密で、一定の就職先が学生に用意されているとも考えられた。

彼と会った二日後ぐらいに京都での内定が出たそうだ。彼は三年ほど仕事をしてから留学しようとも考えてはいると語っていた。

OEさんへのインタビュー (no. 035)

◆対象者

立命館大学文学部東洋史専攻4回生 OEさん

内定先：JR 東海

◆質問

主に面接で注意したこと、企業選びについてポイントを絞った。

Q, 企業選びで気をつけたことは？選んだ企業の基準は？

A, 個人で業績を競い合うような企業には入りたくないと思っていた。仕事でもチームを組んで成し遂げるということをしたかった。そのため金融や商社にはそういったイメージがなく受けるつもりはなかった。しかし、よく分からないで切り捨てるということはしたくなかったので、興味がない業界ほど説明会では回ってみたりした。もともと鉄道関係に興味があったが、インフラという類よりもサービス業の部類でみていた。ESは20社程でしたが、その中には金融系も入っている。保険のために出しているという具合。

企業研究だけでは働きたい会社か分からない。説明会で向こうが話すことも、HPやパンフレットに載っているようなことばかりである。説明会では社員の方の仕事内容の話などを積極的に聞いたほうが、その仕事への理解も高まると思う。

Q, 面接での心構えは？

A, 企業にイメージに合うようなESをまず書いておくこと。ESで書くことも、面接で聞かれることも大体、どの企業であっても、似たようなものなので、ES作成作業ではコピー&ペーストばかりだった気がする。ESでも面接でもそうだが、平凡なことは言わないようにした。人が言っていそうなことを考えて、切り捨てて、ESや面接ではなるべく面接官の印象に残るようなこと言うように心がけた。しかし、こうして振り返ってみると恥ずかしいことも言ったし、面接官の間に対してきちんと答えられているか不安に思うこともある。就活が始まると、落とされてはじめは気を落とすかもしれないが、それもそのうちに慣れてくる。面接が終わった日には、その日の面接を思い返して、反省点を探すということもいいかもしれない。

そして、分からない、答えることがうまくできない質問に対しても、なるべく答えるようにした。これは、自分の都合のいいように答えてしまっていたかもしれない。ただ、

毎回の面接で企業や仕事内容で分からないことは質問していった。こういったことで企業を理解していった。

面接で志望動機を聞かれると思うが、そこまで志望を強く思っていない会社だと、そういった質疑応答の内容を考える時間をとらずに、面接会場に向かう電車の中で考えていたこともよくあったが、やはり、そういったところは浅い内容しか出てこず、落とされたこともある。また、一生懸命考えてきても、落とされてしまうと一日無駄になったと思ってしまうこともある。

Q、 企業・仕事内容についての情報は面接や説明会以外で、例えば OB・OG 訪問などで得ることはあったか？

A、 OB・OG 訪問もやっていないし、インターンシップもやっていない。説明会で社員さんと話すことで情報は集めていた。それで十分だった。インターンシップは企業の PR 目的が強いし、やったからといって就活のときに有利に働くわけではないと聞いたので、やる必要性を感じなかった。

社員さんからの情報は似たような企業の差別化を図る上でとても役に立つ。たとえば、JR 東では駅員の接客マナーの悪さが社員の間でも気になっていることを聞いて、東海・西との違いを見ることもできたし、面接でも同業者の話を持ち出すと面接官も聞いてくれる。

まとめ

OE さんは立命館大のサークル活動ではトップの会長という立場で様々な行事とサークル員の監督を行ってきたが、サークルやバイトの話は面接官がうんざりするほど聞いているために、先にオチなんかを言われてしまうこともあったらしい。そのため、同じような学生時代の〇〇な話であっても、他の学生と違って印象に残るようなことを伝えようと気を配っていたらしい。また、質問に対する答えの的確さについても気をつけたそうだが、今回のインタビューの機会でも振り返ってみると不安なところも多々あったと感じたそう。このような会話を就職活動中に持つともっとよい面接ができたのではないかとも言っていた。

説明会の利用の仕方についても、OE さん本人にはしっかりとした目的があったようだ。説明会から社員さんの話を拾ったり、質問してみたりすることが目的で、そこで得た「現場の声」を面接官に話すと受けがいいらしい。また、同じような企業の面接を受ける際も「A 社はこうだ」「B 社はこうだ」といった違いを出すための材料となるだろうと、話しを聞いていて考えさせられた。

OFさんへのインタビュー (no. 036)

◆対象者

立命館大学文学部東洋史専攻4回生 OFさん

内定先：教育関連

◆質問

主に企業の選び方、面接で心掛けたことについて。

Q, 企業はどのように選んだか？

A, もともと1・2回生のときに旅行関連の免許、資格を取っていたので、旅行関連の職に就きたいと思っていた。様々な面接を受けて、そのうち圧迫面接をされたり、面接官と気が合わないということがあったら、その企業に行きたいとは思わなくなり数が絞れてきた。また、同じように面接を受ける就活生たちとも話（そのうちの何人かは会社に入って同期になって一緒に仕事をするかもしれないので）、その企業の面接に来る人たちの雰囲気自分に合わないと感じたら、自分が入りたいと思う企業の優先順位を決めて、企業によっては辞退したりもした。要は面接に行ったときにその企業の雰囲気を知って、自分に合わないと思ったら行きたいという気持ちが小さくなる。

Q, 企業のパンフレットや説明会は役に立ったか？

A, 説明会でプレゼンされることの大体はHPやパンフレットを見ればわかること。将来産休や育児休暇をとることがあると思ったので、実際にそのような休暇はどれくらい取ることができるのかといったことを説明会では社員の方に質問した。どの企業のHPでもパンフレットでも「産休あり」と書いているだけで、具体的な日数は分からないから。

内定が決まった企業は志望していた旅行関係のものではないが、教育にも興味があり、またその企業の雰囲気が自分に合うと思ったので決めた。他にも幾つか面接が残っていたが、決まったことに安心し、これ以上就活をしたいと思わなかった。

Q, 企業を知る上でインターンシップは必要か？

A, インターンシップが必ずしもその企業を知ることにはつながらないと思う。しかし、インターンシップに参加することで、説明会やその他の集まりについての情報

が得られるので、参加した人としていない人の間では情報の差が出ると思う。社会経験としてはいいかもしれない。インターンシップにしてもリクルーターにしても企業のPR しかないのではないか？と思う。

Q、面接で心掛けたことは？

A、他人とは違ったことをしゃべろうと思った。集団面接のときに、下関のキャンペーンガールの経験を持つ人がいて、そのことだけで自分もその人の話に興味があったが、あまり内容がなく残念だった。経験談を生かして内容のある話ができたらいい。

初めのころは面接に慣れず不安になったが、場数を踏むと慣れてくる。最後のほうでは積極的に面接官に質問をすることができた。初めのほうの面接で、面接官に「私の面接での受け答えはどうでしたか？」と聞いたことがある。もちろん滑り止めの企業だが、面接官がいろいろと指摘してくれてその後の面接に役立った。

このように今になって就活話をすると、他人の面接で使える質問の返し方が聞けて、自分の面接の際に役立てると感じる。是非、就活中は就活生同士が集まって話をするといいと思う。

まとめ

OFさんは立命館大学の知り合いの先輩に紹介していただいた。10月から就活を始め、ESは100社ほど提出したらしい。企業については説明会やパンフレットから主に情報を集め、説明会ではそれらに記載されていないこと、特に産休などについて具体的な話を聞いたそうだ。インターンシップは所詮企業のPRでしかなく、必要性を感じないという考えが以前インタビューを紹介した立命館大のOEさんと共通している。しかし、インターンシップで次回の説明会など面接を受ける上で絶対に必要な情報を得ていく同回生を見ると、参加する、しないかで就活の情報格差が生まれていると考えているようだ。

また、面接を受けることによって、もし将来この面接官や、他の同期とうまくやっていけるだろうかといったことを考えて、企業の取捨選択を行っていたことがわかる。長く企業に勤めるということを考えたときに、会社の中での人間関係を重視しており、そのことが会社選びに直結している。

反省

時間も限られており、初対面ということから突っ込んだ質問は出来なかった。女性ならではの企業の選び方の視点をもっと聞いてみたかったが、男女の就活の仕方の違いについてあまり意識した質問などもできなかった。事前の勉強不足だと感じた。

OGさんへのインタビュー (no. 037)

◆対象者

京都女子短期大学文学科国語専攻2回生 OGさん
就職活動中

◆質問

企業の選び方、面接での心構えについて。

Q, 就職活動はいつ始めたか？

A, 去年の10月から始めた。SPIの勉強は11月頃から始めた。

Q, 合計でいくつの企業を受けたか？

A, ESで10社ほど、試験を受けたもので20社ほどの計30社。

Q, 企業の選び方について

A, 一般職を希望していた。そして勤務地は地元である大阪が良かった。さらに短期大学の学生を受け入れてくれるところ、と条件を絞っていくと、企業も限られてくる。給与や福利厚生といった待遇についてはあまり気にしなかった。

主に金融・メーカーの面接を受けた。企業については説明会で知った。インターンは受けていない。

Q, 面接での心構えは？

A, 笑顔と大きな声を出すということを気にした。また、サークル活動を通じて初対面の人との会話もうまくできるようになったと思うので緊張はしなかった。

Q, 具体的にどのような面接の練習を行ったか？

A, 本番の面接を受ける前に、大学の就職支援プログラムで模擬面接を一人一回受けることができるため、そこで練習を行っていた。

その他に就職支援課ではOGの就活についての感想の他に、面接で気を付けるべきポ

イントや試験対策についてのアドバイスが集められており、学生はそれらを見ることができるので、参考にした。

まとめ

今回は短期大学生の就職活動の在り方について、サークル活動を通じて知り合ったOGさんから伺った。短大生は大学に入った年に4年制大学の3回生とともに就職活動が始めるが、京都女子大学では両者ともに月一回、就活生の進行状況を知るために、電話で連絡を大学側から入れるらしい。さらに模擬面接を就活生のために行うなど、大学が手厚い就活支援を行っていることがわかる。もちろん同志社大学でもキャリアセンターでは個人面談の他に、面接その他についての講習会などがあるが、HPでのアピールの仕方にしても、同志社大学では大々的にアピールしているわけではない。短大生も通う京都女子大学では、4年制大学より新一回生に就活というもの、就活でのサポート体制などを伝えていく必要があるからだろう。また、OGさんの感想によると短大卒の募集だと採用人員が少ない企業が大体のようで、一般企業での競争率は高いようである。

彼女は現在も就職活動中であるが、一週間に面接を一つ、もしくは二つ程のペースでこなしているそうだ。就活よりも大学での勉強の遅れのほうを気にしていると話してくれた。

OHさんへのインタビュー (no. 038)

◆対象

OHさん

就職先：朝日新聞配達員

◆質問

仕事選びの条件、実際に働いてみて感じたこと、就職までの経緯についてなど。

Q、初めの職に就いた経緯は？

A、奥さんの実家から離れたところに住みたいと考え、(東京から)埼玉に引っ越したが、定職に就いていなかったため親戚の知り合いの紹介で工場に就職した。面接はしなかった。そこで一年と三か月ほど働いた。

Q、辞めた理由は？

A、地元(東京世田谷区)に帰りたいと考えるようになり、辞めた。辞めた後、現在の仕事に就く間は引っ越し屋のバイトで働きつないだ。

Q、今の仕事を選んだ理由は？

A、福利厚生がしっかりしていたこと。100万円の積立を会社がやってくれることだけでなく、残業代3万円がつくことも決めてのひとつであった。しかし、実際に働いてみると(所長が代わったこともあり)会社が従業員のための積立をしなくなり、さらに残業代も3万円のうちの何%払われる歩合制にされてしまった。今ではベテランの従業員も待遇の悪さに不満を漏らしている。

Q、今後も現在の仕事を続けるのか？

A、辞めようと思っている。今は2時半から6時半まで朝刊配達、12時半から16時半まで営業、そこから18時半まで夕刊配達、20時まで営業があるが遅い日には23時ぐらいまで仕事をする。そのため家族との時間が取れず、給料も割に合わないため辞めたい。

また、育児を奥さんに任せっきりにしてしまっているため、もっと育児に協力したい。

子供と遊べる時間は平日の仕事の合間ぐらいで、しかもそのような平日がいつでもあるわけではない。

Q、 次の仕事に望むことは？また、学歴は仕事や待遇に影響するか？生かそうと思うか？

A、 普通に朝働いて夕方に仕事が終わるような仕事に就きたい。福利厚生とか待遇はあまり気にしない。現在大検を取っているが、あまり仕事や待遇に影響はないと思う。面接のときに仕事しながら勉強をしたことは評価されると思うが、それによって何か変化があるとは考えていない。

まとめ

OHさんとは小学校からの同級生であり、彼はすでに結婚をしており、二人の子供がいる。彼の最終学歴は中卒であり、現在は大検を取得中である。今までインタビューしてきた人物たちと大分違う経歴や就職経験を持っており、当初から様々な就職活動について知りたかった私にとっては大変興味を持てた。彼の就職活動の場合、まず今までと違って、自分の家族を養わなければならないため定職に就く必要があった。その時には既に一人目の子供が奥さんのお腹の中にいたので、定職に就くことで福利厚生受けるということも目当てのひとつであった。二つ目の職に就くときには、この福利厚生や将来のための積立金についてなど、家族の将来設計を第一とした職選びであった。

しかし、実際に仕事をしてみると家族との時間は無くなり、さらに所長の交代によって約束された積立金の話が無くなり、彼にとって、仕事に求めた待遇・条件に合わなくなってしまった。彼は再び埼玉に戻り、昔のように夕方に家に帰り家族の時間を持てるような仕事を探そうとしている。

○ I さんへのインタビュー (no. 039)

◆対象者

佛教大学院文学研究科 ○ I さん

◆質問

主に、希望の就職について、これからの進路について、就活における院卒と大卒の違いについてなど

Q, 就職活動は行ったか？

A, していない。今これからの進路を考え中。

Q, どのような職を希望しているのか？

A, 地元で公務員として働きたい。そのために公務員試験に向けて今京都でスクールに通っている。

Q, 大学院を卒業することで、就職活動において有益なことがあると思うか？大卒と違う点は何だと思うか？

A, 先ず、大学院についてあまり調べていなかったもので、今そのことを後悔している。大学は同志社に通っていたため、佛教大学の大学院での勝手がよく分からず満足な大学院での勉強ができなかった、慣れなかった。大学と同じ大学院に行ったほうがいいのかも知れない。結局卒業を半年遅らせることにした。親が経営者でもあるので、親のところで働くことも選択肢の一つとして親とも相談している。

Q, 地元こだわりの理由は？

A, 慣れ親しんだ場所なので、そこで長く仕事がしたいと思ったから。自分の知識を生かして地域に貢献したいと思った。

Q, 今後就職活動は行っていくか？

A, 考え中。

まとめ

○ Iさんはサークルの先輩にあたる方で、同志社大学文学部を卒業されたあと佛教大学の大学院に進んだ。大学三回生のときも就職活動はしておらず、大学院への進学を希望していた。現在大学院の一回生であるが、インタビューでもある通り、大学のときに想像していた院生活と大分違うことに失望したようで、一時通うこともなかったらしい。また就職活動を行っていないことから、質問の内容をこれからの進路について絞ってみた。

彼は公務員試験を受けるために院に入ってからスクールに通い出した。しかし、これも一時行かなかった時期がある。一般企業に就職することも、公務員になることも現在考え中であるそうだが、これらのことから院の卒業を半年遅らせるという、とりあえずの結論を出したようである。将来としては「地元貢献したい」という考えがあり、地元青森での就職を希望している。選択肢は様々あるのだが、地元で、彼は親の下で働くのか、公務員になるのか、(大学で教職の講義を取っていたため) 教員になるのか、一般企業に勤めるのかで迷っていた。院生活が中途半端であったと感じていることが、こうした迷いを生み出しているように思えた。

反省

今回は大学院生の就職活動の形態について知りたかったのであるが、就職活動についての姿勢、意識についてしっかりと聞くことができなかった。詳しく話を引き出していけることが次回の目標である。

○ Jさんへのインタビュー (no. 040)

◆対象者

明治大学経済学部 2008 年卒業 ○ Jさん

勤務先：IT 関係 2008 年入社

◆質問

入社し、実際に働きだしてからの企業の印象、これからの将来設計、新入社員やこれから就活を始める人に求めることなどについて絞った。

Q、 就職活動のときに ES はいくつ出したか？また、現在の企業に決めた決め手は何か？

A、 ES は 15 から 20 社ほどだと思う。少ないと思う。今の仕事を選んだ理由は待遇、主に給与が良かったから。ひとつ内定が決まった後は、内定先が提示する待遇よりもいい待遇を提示する企業の面接しか受けなかった。

Q、 働く前のイメージと働き出してからのイメージではどのような違いがあるか？

A、 仕事が楽に感じる。新入社員の頃は SE としていろいろなことを学ばなければならなかったし、付き合いで飲み会の幹事をやったりと忙しかったが、これはある程度予想はしていたし、そのつもりでいた。今では忙しい時期とそうでない時期が分かっているので、それほど仕事やその関係が忙しいと感じたり、きついと感じることはない。

Q、 現在の会社や仕事について不満を感じることはあるか？すでに同期で辞めてしまった人はいるか？

A、 同期は 14 人ほどいるが辞めるものはいない。仕事について特に不満もない。

Q、 この先、今と同じ会社、職場で働いていこうと思うか？

A、 思わない。仕事がつまらないと感じることもあるが、それが理由ではない。待遇に不満があるわけでもない。IT 業界は現在、企業の統合が激しいため、将来について不安に感じることもある。今勤めている会社も電通国際情報サービスに統合されてしまっ

た。しかし、これから先、この統合先も他の大企業に統合される可能性があるため、小さい企業で働くものとしては切られるかもしれないという不安がある。だから、転職も考えたりもしている。一方でキャリアアップの場として今の職場が活かされるとも思わないが、この一年で身に着いたことも生かしていきたい。

Q、これから就職活動を行う学生に会社選びのアドバイスを与えたとしたら？また、どのような人に会社に入ってきてほしいか？

A、仕事は自分の好きなことをすればいいと思うが、いろいろ難しいと思う。会社を選ぶ際に何を一番にして考えるかは人それぞれだし、何を一番にするのかをよく考えた方が良い。給与や待遇なのか、好きなことをやりたいのか、プライベートや趣味を大切にしたいのか。入社してから、他の仕事をしている人の話を聞くと仕事が面白そうだと思う一方で、その他の面で見たら、現在の仕事の待遇がいいとも感じるし、このことは会社選びで難しいとは思いますが。

新入社員はしっかりコミュニケーションをとれる人に来てほしいと思う。人との繋がりを面倒に思わずしっかりやってほしいし、それが新入社員の仕事だとも思う。

まとめ

今回は入社してから約一年と半年になるOJにインタビューを試みた。今年入社先輩方にも話を伺うことができたが、新入社員の経験を持ち、これから新入社員を迎える人の話、またこれからのキャリアアップについてなどの話はやはり社会人としての多少長く過ごした人の話を聞くのが一番良いのではないかと考え、彼にインタビューすることになった。

彼が就職活動を行った時期は割合、就職しやすい時期でもあった。そのため会社に求める「何か一番にするもの」を優先して選りすぐりができたころであっただろう。しかし、こうしたある程度の目標を定めておいて、妥協しながら職を選んでいくことも重要だとインタビューから感じ取った。仕事なのだから当然、好きにはなれないこともあるだろうし、きついこともあるだろうが、就職活動の時にこうしたことへの妥協が必要であり、一定のスタンスを保ちながらも、状況において自分を適応させたり、変化させたりできる身軽さも必要となっていくのであろう。こうしたことは社会人だけでなく、これから就職活動を行っていく人にとっても求められていくことのようなのだ。